

【 復活讃詞 第4調 】

しゆのおんなでしはふくかつのひかるおと
主女弟子は復活光音
づれをてんしよりききうけえて、
天使聞き受
げんそよりのていざいをふるいすて、しと使徒
原祖定罪振棄
にほこりていえり、しはほろぼさに
誇日死滅
れ、ハリストスかみはふくかつして、せかいに
神復活世界
おおいなるあわれみをたまえり。
大憐賜

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今
いつもよよに、アミン。
何時世世
しととひとしくどうぞなるものちゅう
使徒等同座者忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智なるハリストスの役者、せい聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい愛
 神撰 笛

にみちたるうつわ、わがくにのこう光
 満 器 我 國

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亞使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

司祭) (黙誦： せい かみ せいじゃ うち いこ せいさん こえ もつ かしょう
 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう
 讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゅう じゅう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐 め

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、
 主 爾 工業 何 大
 みなちえをもつてつくれり。
 皆 智慧 以 作

誦經) 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、
 主 爾 工業 何 大
 みなちえをもつてつくれり。
 皆 智慧 以 作

誦經) 主よ、爾の工業は何ぞ多き、



【 使徒經 (アポストロス) 203 端 ガラティヤ書 2 章 16 節～20 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルがガラティヤ人^{じん たつ}に達する書^{しよ}の讀^{よみ}、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、人^{ひと}は律法^{りっぽう}の行^{おこない}に由^よるに非^{あら}ず、唯^{ただ} イイスス・ハリストス^{しん}を信^よずるに由^ぎりて義と

せらるるを^し知りて、我^{われら}等もハリストス・イイスス^{しん}を信^{しん}ぜり、ハリストス^{しん}を信^よずるに由^{りっぽう}り、律法

の行^{おこない}に由^よらずして、義とせられん爲^ぎなり、蓋^{ため} 律法^{けだしりっぽう}の行^{おこない}に由^よりては、人^{ひと}一^{ひとり}も義とせ

らるるなし。若^もし我^{われら}等ハリストス^よに由^ぎりて義とせられんことを求^{もと}めて、自^{みづから}も猶^{なお}罪人^{ざいにん}たらば、

^{あに} 豈^{つみ}ハリストスは罪^{えきしや}の役者^{しか}たるか。非^{けだしも}らず。蓋^わ 若^{こぼ}し我^{もの}が毀^{われ}ちたる者^{また}、我^た復^た之^たを建^たてば、

^{すなわち} 則^{おのれ} 己^{ざいにん}の罪人^{しめ}たるを示^{われり}すなり。我^よ 律法^{りっぽう}に由^りりて律法^{りっぽう}の爲^{ため}に死^しせり、神^{かみ}の爲^{ため}に生^いきん

爲^{ため}なり。我^{われ}ハリストスと共^{とも}に十^{じゅう}字^{じか}架^{てい}に釘^すせられたり。既^{すで}に我^{われ}生^いくるに非^{あら}ず、即^{すなわち} ハリス

トスは我^{われ}の中^{うち}に生^いくるなり。我^わが今^{いま}肉^{にく}体^{たい}に在^ありて生^いくるは、我^{われ}を愛^{あい}して我^わが爲^{ため}に己^{おのれ}を捨^す

し神^{かみ}の子^こを信^{しん}ずるに由^よりて生^いくるなり。

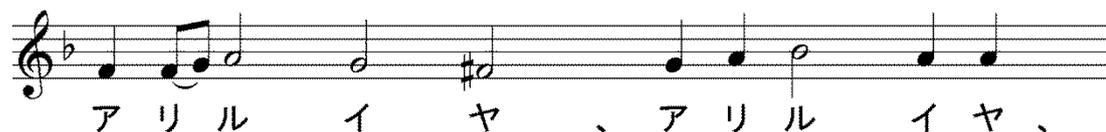
(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと思ふなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

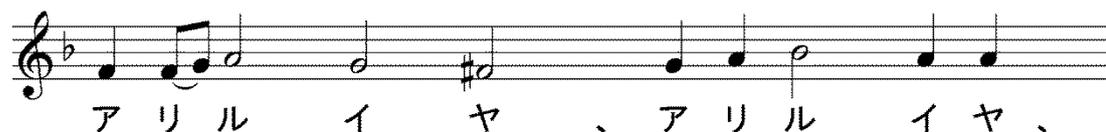
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 】

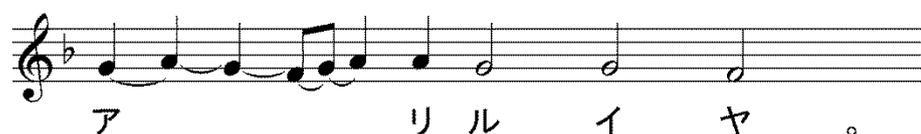
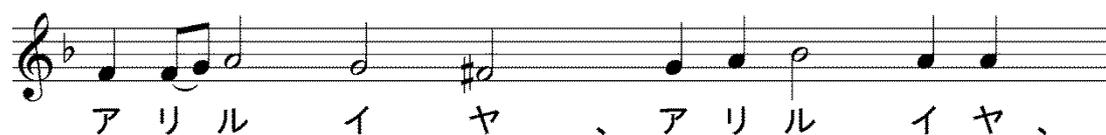
司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{かみ なんぢ ほうぎ よよ あ なんぢ くに けんぺい せいちよく けんぺい} 神よ、爾の寶座は世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾は義を愛し、不法を惡めり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

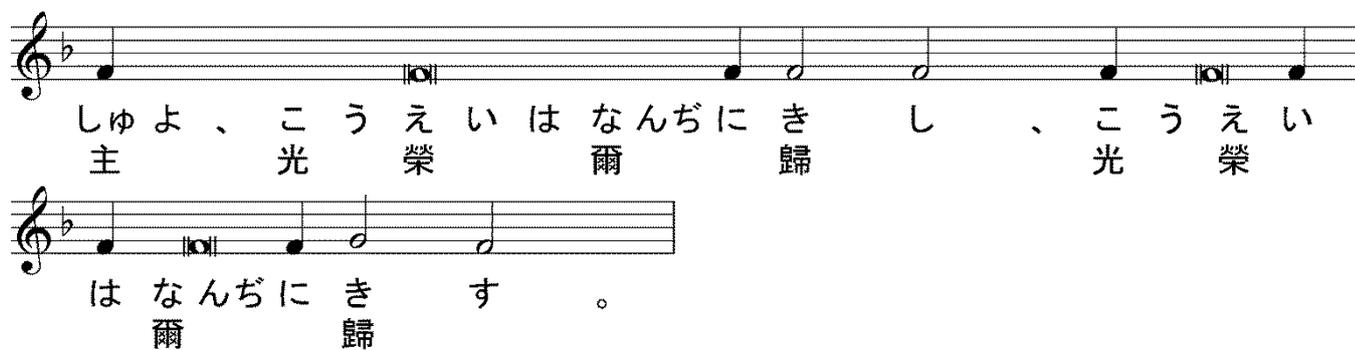
なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 38 端 8 章 26~39 節 】

司祭) 睿智、^{えいち つつし} 肅みて立て^た 聖福音經^{せいふくいんけい} を聴くべし、衆人^{しゅうじん} に平安^{へいあん}、



司祭) ルカ傳^{でん}の聖福音經^{せいふくいんけい}の讀^{よみ}、



司祭) 謹^{つつし}みて聴くべし、彼の時^{かとき} イスス ガリレヤに對^{むか}えるガダラの地^ちに來りて、彼が岸^{かき}に登^{のぼ}りし時、邑^{とき}の一人^{まちひとり}の者^{もの}彼^{むか}を迎えたり、乃^{すなわち}久しく魔鬼^{まき}に憑^よられ、衣^{ころも}を衣^きず、家^{いえ}に住ま^すずして、墓^{はか}に住める者^{もの}なり。此^この人^{ひと} イススを見て號^みび、彼の^か前^{まえ}に俯^ふ伏^{ふく}し、大^{おお}なる聲^{こえ}を以^{もつ}て曰^いえり、至^{しじょう}上^{かみ}なる神^この子^{われ} イススよ、我^{なんぢ}と爾^{なん}と何^{あづか}ぞ與^{なんぢ}らん、爾^{もと}に求^{われ}む、我^{くる}を苦^なしむる勿^けれ。蓋^な イススは汚^お鬼^きに此^この人^{ひと}より出^いづるを命^{めい}じたり、其^{その}彼^{かれ}を拘^とえしこと久^{ひさ}しければなり。彼^{かれ}を守^{まも}りて、鐵^{くさり}索^{かせ}と桎^{つな}梏^なとに繋^かぎたれども、彼^{かれ}繋^{つな}ぎを斷^たちて、魔鬼^{まき}の爲^{ため}に野^のに逐^おわれたり。イスス彼^{かれ}に問^といて曰^いえり、爾^{なんぢ}の名^なは何^{なに}ぞ、彼^{かれ}曰^いえり、大^レ隊^{ゲオン}、多^{おお}くの魔鬼^{まき}彼^{かれ}に入^いりたればなり。魔鬼^{まき}はイススに、彼^{かれ}等^らに淵^{ふち}に往^ゆくを命^{めい}ぜざらんことを求^{もと}めたり。彼^か處^こに豕^{ぶた}のおおむれやまか、魔鬼^{まき}は彼^{かれ}に、其^{その}中^{なか}に入る^いを許^{ゆる}さんことを求^{もと}めたれば彼^{かれ}之^{これ}を許^{ゆる}せり。魔鬼^{まき}人^{ひと}より出^いでて、豕^{ぶた}に入^いりしに、群^{むれ}は山^が坡^けより湖^{みづうみ}に逸^かけて溺^{おぼ}れたり。牧^かう者^{もの}有^ありし事^{こと}を觀^みて、奔^{はし}り往^ゆきて、邑^{まち}及^{およ}び諸^{むら}村^{むら}に告^つげたれば、人^{ひと}人^{びと}有^ありし所^{ところ}を觀^みん爲^{ため}に出^いで、

イイスに^{きた}来^{まき}りて、^い魔^{ひと}鬼^{ころも}の出^きでたる^{こころたしか}人^{そくか}が^ざ衣^みを^{おそ}着^み、^{もの}心^{まき} 慥^よにして、^{ひと}イイス^{いか}の^{いや}足^つ下^{ちほう}に^{かえ}坐^{かえ}せる
 を^み見^{おそ}て、^み懼^{もの}れたり。^{まき}見^よし者^{ひと}は^{いか}魔^{いや}鬼^つに^{ちほう}憑^{かえ}られた^{かえ}る^{かえ}人^{かえ}の^{かえ}如^{かえ}何^{かえ}に^{かえ}愈^{かえ}され^{かえ}し^{かえ}を^{かえ}告^{かえ}げ^{かえ}た^{かえ}ら^{かえ}ば^{かえ}、^{かえ}ガ^{かえ}ダ^{かえ}ラ^{かえ}地^{かえ}方^{かえ}
 の^{たみ}民^{みな}は、^{かえ}皆^{かえ}イ^{かえ}イス^{かえ}ス^{かえ}に^{かえ}彼^{かえ}等^{かえ}を^{かえ}離^{かえ}れ^{かえ}ん^{かえ}こ^{かえ}と^{かえ}を^{かえ}請^{かえ}え^{かえ}り、^{かえ}大^{かえ}に^{かえ}懼^{かえ}れ^{かえ}し^{かえ}故^{かえ}な^{かえ}り。^{かえ}彼^{かえ}舟^{かえ}に^{かえ}登^{かえ}り^{かえ}て^{かえ}返^{かえ}
 れ^{かえ}り。^{かえ}魔^{かえ}鬼^{かえ}の^{かえ}出^{かえ}で^{かえ}た^{かえ}る^{かえ}人^{かえ}は^{かえ}彼^{かえ}と^{かえ}偕^{かえ}に^{かえ}居^{かえ}らん^{かえ}こ^{かえ}と^{かえ}を^{かえ}求^{かえ}め^{かえ}た^{かえ}れ^{かえ}ど^{かえ}も、^{かえ}イ^{かえ}イス^{かえ}ス^{かえ}之^{かえ}を^{かえ}去^{かえ}らし^{かえ}め^{かえ}て^{かえ}曰^{かえ}
 り。^{かえ}爾^{かえ}の^{かえ}家^{かえ}に^{かえ}歸^{かえ}り^{かえ}て、^{かえ}神^{かえ}が^{かえ}如^{かえ}何^{かえ}なる^{かえ}事^{かえ}を^{かえ}行^{かえ}い^{かえ}し^{かえ}を^{かえ}告^{かえ}げ^{かえ}よ。^{かえ}彼^{かえ}往^{かえ}き^{かえ}て、^{かえ}全^{かえ}邑^{かえ}に^{かえ}イ^{かえ}イス^{かえ}ス^{かえ}
 が^{かえ}彼^{かえ}に^{かえ}如^{かえ}何^{かえ}なる^{かえ}事^{かえ}を^{かえ}行^{かえ}い^{かえ}し^{かえ}を^{かえ}宣^{かえ}べ^{かえ}たり。

(比較用 口語訳) 彼らはガリラヤの対岸、ゲラサ人の地に渡った。陸にあがられると、その町の人で、
 悪霊につかれて長いあいだ着物も着ず、家に居つかないで墓場にばかりいた人に、出会われた。この人
 がイエスを見て叫び出し、みまえにひれ伏して大声で言った、「いと高き神の子イエスよ、あなたはわ
 たしとなんの係わりがあるのです。お願いです、わたしを苦しめないでください」。それは、イエスが
 汚れた霊に、その人から出て行け、とお命じになったからである。というのは、悪霊が何度も彼をひき
 捕えたので、彼は鎖と足かせとでつながれて看視されていたが、それを断ち切っては悪霊によって荒野
 へ追いやられていたのである。イエスは彼に「なんという名前か」とお尋ねになると、「レギオンと言
 います」と答えた。彼の中にたくさんの悪霊がはいり込んでいたからである。悪霊どもは、底知れぬ所
 に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬようと、イエスに願いつづけた。ところが、その山
 へにおびたしい豚の群れが飼ってあったので、その豚の中へはいることを許していただきたいと、悪
 霊どもが願い出た。イエスはそれをお許しになった。そこで悪霊どもは、その人から出て豚の中へは
 入り込んだ。するとその群れは、がけから湖へなだれを打って駆け下り、おぼれ死んでしまった。飼う者
 たちは、この出来事を見て逃げ出して、町や村里にふれまわった。人々はこの出来事を見に出てきた。
 そして、イエスのところにきて、悪霊を追い出してもらった人が着物を着て、正気になってイエスの足
 もとにすわっているのを見て、恐れた。それを見た人たちは、この悪霊につかれていた者が救われた次
 第を、彼らに語り聞かせた。それから、ゲラサの地方の民衆はこぞって、自分たちの所から立ち去っ
 てくださるようとイエスに頼んだ。彼らが非常な恐怖に襲われていたからである。そこで、イエスは舟
 に乗って帰りかけられた。悪霊を追い出してもらった人は、お供をしないと、しきりに願ったが、イエ
 スはこう言って彼をお帰しになった。「家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださ
 ったか、語り聞かせなさい」。そこで彼は立ち去って、自分にイエスがして下さったことを、ことごとく
 町中に言いひろめた。*****

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオン聖体礼儀）へ